様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　5 年　6 月　2 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：19K02541

研究課題名（和文）準拠枠としてのパーソナルネットワークと親の教育態度

研究課題名（英文）Personal Networks as a Frame of Reference and Parental Educational Attitudes

研究代表者
荒牧　草平（Aramaki, Sohei）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：90321562

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　子育てネットワークに関する従来の研究は、育児期の母親を対象とした支援機能の解明に偏っていた。これに対し本研究は、①理論的・経験的研究のレビューに基づき、ネットワークの5つの機能を抽出し、②研究対象をポスト育児期の父親にも拡大して、ネットワークの多様な機能がもたらす効果を検討する初めての調査を実施した。その調査データを用いて、様々な教育態度に対するネットワークの多様な機能について分析を行い、子育てネットワークの状態が、「孤立」「競争」「共生」という3つのキーワードによってとらえられることを明らかにした。また、それらをふまえて、より望ましい社会に向けた提言を行った。以上の内容を書籍にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来の子育てネットワーク研究の関心は、ネームジェネレーター方式によるダイアドデータに基づいて、2者間の支援関係と規範的制約を解明することに集中していた。これに対し、本研究は、2者を取り巻く「ネットワーク環境」にも着目し、参照機能や居場所機能など多様な機能の効果に着目した。こうした研究枠組に基づいて調査データを用いた分析を行い、以下の点を検討した。第1に、特定の2者間の関係における比較機能や制約機能がもたらす「競争」のメカニズムに焦点を当てた。第2に、ポジティブな機能を果たすネットワーク環境の規模が、共生志向や社会への信頼感など、向社会的な影響をもたらす可能性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Previous studies on parenting networks have been focused elucidating support functions for mothers in the infant care period. Based on a review of theoretical and empirical studies, however, we extracted five functions of networks, and also expanded the respondents of our research to include fathers in the post infant care period and conducted the first survey to examine the effects of these functions of the networks. Using this survey data, we analyzed the effects of these functions of the networks with respect to various educational attitudes, and clarified that the state of the parenting networks can be captured by three key words: "isolation," "competition," and " conviviality". Based on these findings, we made suggestions for a more desirable society. The above contents are reported in a book.

研究分野：教育社会学

キーワード：パーソナルネットワーク　準拠集団　共生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
（1）近年、教育達成に対する多世代にわたる家族や親族の影響に着目する研究が諸外国で活発化しており（Mare 2011; Deindl and Tieben 2012; Lawrence 2012; Hällsten 2014; Song and Mare 2017 など）、日本のデータを用いた研究でも、子どもの教育達成に祖父母やオジオバの学歴が直接的な関連を持つことが指摘されている（荒牧 2011, 2016；荒牧・平沢 2016 など）。従来の理論枠組から類推すれば、これらの関連は、親族の持つ社会経済的地位や文化資本などが、子どもに伝達されることで生じたものと理解できるが、このような観点では、拡大家族の影響を十分に説明できないことが指摘されている（荒牧 2016；荒牧・平沢 2016 など）。
　別の可能性として有力視されているのが、親の教育期待を媒介したメカニズムによる理解である。すなわち、親自身の親キョウダイ（子どもの祖父母やオジオバ）の持つ学歴や考え方が親の教育期待に影響を与え、結果的に子どもの教育達成に繋がるということである（拡大家族の学歴や考え方→親の教育期待→子どもの教育達成）。「教育と社会階層」（ESSM）データを用いた分析でも、「親の教育期待を媒介したメカニズム」という解釈に適合的な結果が得られている（荒牧 2018）。

（2）ところで、子どもの祖父母やオジオバは、子どもの親にとっては自分の親キョウダイであり、自らが持つパーソナルネットワークの構成員でもある。また、一般にパーソナルネットワークには家族以外の友人・知人も含まれる。ここで、マートン（Merton 1957＝1961）の準拠集団論を参考にすれば、上記の「媒介メカニズム」は、親を中心として以下のようにとらえ直すことが可能である。すなわち、親たちは、自分の準拠集団である親族や友人・知人の地位や考え方を選択的かつ意図的に参照して、自らの教育期待を方向づけているのではないかということである。ここから、親の教育期待は、家族内外のネットワーク構成員から影響を受けて形成されていると予想できるが、こうした観点からは研究がなされていない。
　一方、ネットワークの機能については国内外で様々な研究が積み重ねられてきたが、主に検討されてきたのは、ネットワークの「制約」機能や「資源提供」機能であった（Granovetter 1973＝2006; 大谷 1995）。このうち、親の子育て態度に対するパーソナルネットワークの影響については、家族社会学領域で研究が積み重ねられてきたが、その関心は乳幼児の育児を行う母親に対するネットワークの支援（資源提供）機能に集中している（落合 1989；関井ほか 1991；久保 2001；前田 2004, 2008；松田 2001, 2008；星 2011, 2012 など）。したがって、ネットワークメンバーが親の教育期待や教育態度形成の準拠枠となる可能性など、ネットワークの多様な機能については検討されていない。また、調査対象も育児期の母親に限定されており、ポスト育児期の子どもを持つ者や父親が除外されている。

２．研究の目的
（1）本研究の第 1 の目的は、教育達成にとどまらない親の教育態度に対して、家族内外のパーソナルネットワークがおよぼす影響を解明することにある。上述の通り、教育達成に対する親以外の親族の影響に着目する研究は、諸外国にもみられるが、親族以外の影響までは検討されていない。そのため、教育達成に限らず、より幅広い親の教育態度にまで拡張した研究は見当たらない。しかしながら、この関連を解明することは、様々な教育問題（教育格差、育児不安、不登校、過熱した受験競争、等々）の背景を、親のネットワークの影響という新たな観点から解明すること（したがって、諸問題を新たな角度から解決する手立てを講じること）にも繋がり得る。

（2）第 2 の目的は、ネットワークの機能を従来の「制約」機能や「資源提供」機能だけでなく、「準拠枠」機能も含めた、多様な機能から理解することにある。特に、子育てに対するネットワークの影響は、上記の通り支援機能を中心に進められており、ネットワークは子育てを支援するという理解が中心であった。しかし、家族内外のネットワークが教育態度に与える影響は支援には限らないはずなので、ネガティブな影響も含め、ネットワークの多様な機能を解明するよう試みる。

（3）第 3 の目的は、従来の子育てネットワーク研究では対象外とされがちであった、ポスト育児期にあたる小中学生の子どもを持つ、母親だけでなく父親も対象とし、子育て態度に対するネットワークの機能の男女差にも焦点をあてることにある。母親と父親では、子育てへの関わり方も人づきあいのあり方も異なるはずなので、それらがどのように関連しているのかを解明することは、子育て態度の男女差の実態を解明する上でも有意義である。

３．研究の方法
（1）旧課題（「家族制度と社会関係の観点からみた階層効果の再検討」（課題番号：15K04367））において実施した調査データを用いて、教育期待（学歴志向）形成に対するネットワークの準拠枠機能という見方の妥当性の検討を行う。

（2）ネットワークの影響に関する研究レビューを行い、ネットワークの多様な機能を理論的にどのようにとらえるべきかを整理するとともに、実証的に測定するための方法を検討する。

（3）利用可能な既存のデータを用いて、教育期待（学歴志向）以外の親の教育態度とパーソナルネットワークとの関連を検討する。

（4）以上をふまえて、様々な教育・子育て態度に対する、パーソナルネットワークの多様な機能を測定可能な調査項目を作成し、南関東の一都三県に居住する、小中学生の子どもを持つ父母を対象に調査を実施する。このうち母親については、層化二段無作為抽出法により 1,200 ケースを抽出し、郵送法による質問紙調査を実施する。また、父親については、母親と同じ方法では有効な回収が難しいと予想されるため、調査会社の登録モニターから、都市規模と学歴構成を考慮した比例割り当てを行い、500 ケースを収集する。

４．研究成果

（1）親の教育期待に対するパーソナルネットワークの準拠枠機能という見方の妥当性について検討を行い、『教育格差のかくれた背景：親のパーソナルネットワークと学歴志向』（勁草書房）という著書にまとめた。

本書の主な成果は以下のように表すことができる。1）教育格差の背景要因として、従来は、親の社会経済的背景や文化資本など、親が子どもに与える影響にのみ着目してきた。しかしながら、教育格差は、そうした「核家族枠組」にはおさまらない、親以外の親族や、親族以外の他者も影響していることを様々な調査データに基づいて実証的に明らかにした。2）パーソナルネットワーク論の知見も整理しながら、親以外の親族や親族以外の他者が教育格差に関与するメカニズムをとらえる枠組を呈示するとともに、その妥当性を実証的に検討した。3)「核家族枠組」を超えた教育格差のかくれた背景を指摘することによって、格差縮小を目指す政策や対策を、より実効性のあるものとする際に考慮すべき課題について、検討を行った。

（2）ネットワークに関する理論的・実証的研究のレビューに基づき、ネットワークの機能を「規範的制約機能」「支援機能」「模範（相手を手本とする）機能」「比較機能」「居場所（信頼感や安心感を持てる）機能」に整理して調査すべきことを明らかにした。

（3）幼稚園の保護者を対象とした育児不安に関する調査データの分析から、情緒的・情報的支援機能を果たすネットワーク規模が多かったり友人を頼りにできる場合には孤立不安になりにくいが、参照ネットワークの規模が大きかったり、他の保護者と比較したりする場合には不安度が高く、また完璧な育児を求めて不安になりやすいことなどが明らかとなった。

（4）家族社会学会の実施した全国家族調査（NFRJ18）のデータを用いた、養育態度（受容的態度と拒否的態度）に関する分析から、男女とも配偶者を参照することは受容的態度につながること、女性の場合に限り、親や他の保護者を参照することが、拒否的態度につながること、などが明らかとなった。

（5）以上の結果をふまえた独自調査（PNP 調査）の結果から、ネットワークの多様な機能の使い分けについて検討した結果、男女で傾向が異なり、男性の場合は内容によらず妻の役割が大きいが、女性の場合は紐帯種別によって、ネットワークの機能が使い分けられていることが明らかとなった。また、女性の場合は、相手の学歴が高い場合に、交際相手が様々な機能を発揮しやすいことも示された。

（6）PNP 調査データを用いた分析から、比較機能や制約機能を果たすネットワークの規模が大きく、特定の相手（女性の場合は特に他の保護者、男性の場合は同僚）と競い合う関係にある場合には、子どもに地位達成を求め、小学生の子どもに塾通いをさせるとともに、子育てに対する不安感が強く、幸福感はあまり高くないといった傾向を持つことが明らかとなった。

（7）PNP 調査データを用いた分析から、支援機能・居場所機能・模範機能を果たすネットワーク規模が大きい場合は、育児不安になりにくく、肯定的な態度で子どもに接し、子どもが人々と協力し合って世の中に貢献するような大人になることを求めるとともに、弱者救済が重要であると考え、幸福感や社会に対する信頼感も高い傾向にあることが明らかとなった。

（8）上記（2）から（7）の内容を多重対応分析によって整理し、子育て世代のネットワークの様相が「孤立・競争・共生」の 3 語によって把握できることなどを明らかにし、より望ましい社会に必要とされる条件整備について議論した。以上の成果を『子育て世代のパーソナルネットワーク：孤立・競争・共生』（勁草書房）という著作にまとめた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 荒牧草平	４．巻 33(2)
２．論文標題 親の養育態度に対するネットワークの参照機能：性別と紐帯種別による多様性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 家族社会学研究	６．最初と最後の頁 104-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4234/jjoffamilysociology.33.104	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 荒牧草平	４．巻 32
２．論文標題 パーソナルネットワークの影響再考	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本女子大学紀要 人間社会学部	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 二見雪奈・荒牧草平	４．巻 31
２．論文標題 母親の育児不安に対する育児ネットワークの多様な効果：支援機能と参照機能の違いに着目して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本女子大学紀要　人間社会学部	６．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒牧草平	４．巻 30
２．論文標題 子育て志向に対するソーシャルキャピタルの影響：地位達成志向と社会貢献志向に着目して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本女子大学紀要 人間社会学部	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒牧 草平	4．巻 49
2．論文標題 親の公共的価値志向とパーソナルネットワーク	5．発行年 2023年
3．雑誌名 大阪大学大学院人間科学研究科紀要	6．最初と最後の頁 121～137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90750	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 荒牧草平
2．発表標題 教育格差のかくれた背景：準拠枠としてのネットワーク論の妥当性
3．学会等名 日本家族社会学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 荒牧草平
2．発表標題 子育て世代のパーソナルネットワーク：紐帯種別による機能の使い分け
3．学会等名 日本家族社会学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 荒牧草平
2．発表標題 親の公共的価値志向とパーソナルネットワーク
3．学会等名 日本教育社会学会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 荒牧草平	4．発行年 2019年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 247
3．書名 教育格差のかくれた背景：親のパーソナルネットワークと学歴志向	

1．著者名 荒牧草平	4．発行年 2023年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 255
3．書名 子育て世代のパーソナルネットワーク：孤立・競争・共生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

子育て世代の人づきあいと希望に関する調査
https://aramaki-jwu.mystrikingly.com/

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関